



ナンシー
オロペサ
バルセロ

活動:

日系人会メンバー

収集家

ナンシーさんと日系人コミュニティー

「青年の島のナンシーさん」として知られていますが、ナンシーさんは実はシエンフエゴス県のアグアダ・デ・パサヘロスで1957年に生まれました。1977年に青年の島特別行政区を訪れた際は、そこが特別な場所になるとは思っていませんでした。1980年、トクオさんと出会い、結婚、それ以来青年の島や首都ハバナで開催される日系人の活動に同行するようになりました。彼女の日本に対する熱意はすぐに伝わり、日本人の家系ではないにも関わらず、すぐに島の日系人コミュニティーの一員として迎え入れられました。その後、青年の島の日系人コミュニティーの生活に関する調査を行い、日本の料理、伝統、工芸、習慣について独自に研究を重ねました。その成果は、『青年の島の日本人社会：100年の伝統』（エル・アブラ出版社）という本にまとめられ、2005年に出版されました。

ナンシー・オロペサ・バルセロさんは、日系2世のトクオ・モデスト湊さんと結婚した、青年の島（ラ・フベントウ島）の日系人会メンバーです。自身の日本物品コレクションの展示を様々な場所で行っており、またキューバ各地で行われている日本関連のイベントに積極的に参加するナンシーさんは、日本文化イベント関係者の間では有名です。ナンシーさんの日本への思い、そして出会いを大切に作る姿勢は、一枚一枚愛情を込めて「湊家へようこそ」と日本語で手書きされた名刺によく表れています。



湊家（2004）



本の出版記念（2005）

ナンシーさんはどんな時も日系社会の活動から離れることはありませんでした。そして、文化的・政治的に影響力の強い人々と深い関わりがあるわけでもないのに、キューバで日本に関わる活動をしている多くの人から知られるようになりました。それはナンシーさんが「日本を、そしてその文化と歴史を心から愛しているからです」とキューバ日系人連絡会のアラカワ会長は語ります。「彼女は無条件に日本を愛しているのです。私にとってナンシーさんは、日本とその文化を無条件に愛する人の手本です」と付け加えました。ナンシーさんは日系人社会の中に、特別な居場所を持ち、唯一の非日系人として例年キューバ日系人墓地の参拝と慰労会に招待されています。

ナンシーさんの 日本博物館

1997年、ナンシーさんは偶然キューバへの日本人移民、特に青年の島への移住について情報収集をしていた日本人の学生の方々に家に迎えました。ナンシーさんに日本的な「おもてなし」精神を感じたのでしょう。それをきっかけに、

日本からの来訪者が増え、「その年から現在に至るまで、1000人以上の日本人が私の家を訪れました」と、ナンシーさんは語ります。日本の方々が残す思い出の品、写真、お土産などは、彼女の宝物となりました。「全て私の一部だから、大事に保管しています。これら一つ一つにそれぞれの物語が詰まっているのです」と言います。これらはナンシーさんの「コレクション」となり、彼女の家は、友人たちの間では「ナンシーの日本博物館」と呼ばれるようになりました。サンティアゴ・デ・クーバ県の造形美術及びデザインセンターの学芸員で、同県の日本文化愛好団体「Mangakure-san（マンガクレサン）」の代表を務めるロシオ・デ・ロス・アンヘレス・クルス・トランソ氏は、「彼女の日本文化の品々のコレクションは、キューバで最大級と言えるでしょう。これらのコレクションは彼女の大きなモチベーションに後押しされ、青年の島、ハバナ、さらにはサンティアゴ・デ・クーバ県まで、全国で展示されました。彼女は活発な日本文化の推進者です」と言います。

日本人キューバ移住120周年にあたる2018年に、青年の島の博物館において、ナンシーさんは自身のコレクションの中から、キューバに最初に到着した日本人移民の所有物や写真を「移民の軌跡」という題で展示しました。翌2019年の日本・キューバ外交関係樹立90周年には、ハバナ旧市街の博物館「アジアの家」で、「私に届いた一千回の日本」という題でたくさんの思い出の品を展示しました。

これら二つの周年イベントにはキューバとも関係の深い日本人ピアニストである川上ミネ氏が招待され、ナンシーさんは川上氏との再会を果たしたのです。というのも、川上氏は2006年に青年の島に住む日本人家族の写真を撮りに来た日本人カメラマンに同行し同島を訪れた際に、ナンシーさんに会っているのです。その時の様子について、川上氏は、



日本の服展示会
(ヌエバ・ヘローナ、2019)



展示のための荷物を運ぶナンシーさん



ナンシーさんとトクオさんの家で日系人会のメンバーと (1996)



「私に届いた一千回の日本」展示会オープニング (博物館「アジアの家」、2019)

「ナンシーさんに初めてお会いした時の事を今でも時々思い出します。日本から遠い道のりを経て到着した青年の島でナンシーさんのご自宅のドアが開いた瞬間、まるで日本の春風のようにうららかで優しい風が私に吹いてきた事を」とメッセージを綴りました。「その時にいただいた日本語の手作りカードを今も大切に持っています。どんな時も日本を愛し、日本の事を学び続け、そして私たち日本人が時に忘れてしまいそうな日本の奥深さに気づかせてくれるのもナンシーさんです。ナンシーさんとの出会いのおかげで、私も更にキューバの人を敬い愛する気持ちがますます深まった事を覚えています。彼女は日本とキューバの架け橋・・・いや、橋を越えて、まさに兩岸のキューバと日本の間を行き来し、私たちの心を幸せな喜びに震わす春風のような人だと思います。」川上氏の言葉は、彼女の音楽のように、ナンシーさんとの出会いを鮮明に語ります。

参加がもたらす友情の絆

ナンシーさんはまた、全国各地の様々な日本文化に関するイベントに積極的に参加しています。そして、いつしかそれぞれの開催者にも認知されるようになります。

ハバナの日本文化愛好団体「FREAKZONE（フリークゾーン）」代表のエンリケ・マヨ氏は、「僕を『最上のオタク（日本文化愛好家の意）』と呼ぶナンシーさんこそ、キューバにおける最大の日本文化愛好家だと思います。彼女は僕らの後見人です。心配りができ、親切で、礼儀正しく、明るく、どんなイベントにも必ず参加する、それがナンシーさんです」と笑顔で語ります。芸術大学（ISA）の日本文化講座長であり居合道を教えるセサル・トウィ先生は「ナンシーさんは、私にとって、この国で最も精力的に日本文化を広めている人の一人です」と語ります。40年以上前からナンシーさんを知り、ハバナで合気道を教えるホセ・バルバ先生は、自身のコレクションの入ったバッグを両手と両肩に抱えて青年の島からの船から降りてくるナンシーさんを思い出しながら、シンプルに「すごい人だ!」と言います。カマグエイ市の日本文化愛好団体「MangaQ'ba（マンガクバ）」の代表のフアン・カルロス・ヒル氏はマンガクバのイベントにナンシーさんが参加したことを思い返し、「ナンシーさんの良いところはたくさん思いつきますが、私にとって一番大切で顕著なところは、彼女のつきないエネルギーと熱意だと思います。彼女は、この国における日本文化の真の愛好者であり、推進者です」と語ります。

キューバ各地で日本を愛好し、様々な形でその文化の普及に努める社会文化団体はいくつもあります。彼らのイベントには数千人の参加者（特に若年層）がいますが、その中で、政府関係者や著名人でもないにも関わらず、日本への情熱を持ち、出会いの一つ一つを大事にするナンシーさんは際立ちます。

一期一会

ナンシーさんは2016年の退職を機に、論文の書き方、博物館の理論・実践研究、絵画、紙粘土、手漉き紙など、様々なコースに参加し始めました。しかし、キューバだけでなく世界を襲った新型コロナウイルス感染症流行の波は、ナンシーさんの日常生活をも一変させました。あらゆる文化イベントは中止され、外出すらままならない日々が続いたのです。ようやくキューバでコロナ禍が落ち着いた2022年に、各地で様々なイベントが開催されるようになりました。そんな時、「11月にハバナで開かれる日本文化週間に参加しないのか」という友達からの電話に、「もちろん」と胸を弾ませました。「不安でたまらなかった私に勇気をくれたのは、やっぱり日本文化でした」と笑顔で語ります。そして、2022年10月には、65歳で陶芸の勉強を始めたのです。

日本に行ったことはないけれど、日本と日本の人々、日本の価値観や本質に対するナンシーさんの情熱は、無条件の愛と生まれついた親和力の表れと言えます。ナンシーさんの、人生におけるすべての出会いや小さな出来事を大切にす一期一会の姿勢は、知らないうちに人々の間の友情と絆を深めているのです。彼女の情熱にたくさん学ぶべきことがあると知らされます。



ハバナ日本文化週間（2012）



ナンシーさんにとって父親のような存在であった、日本人移民最年長だった島津三郎さんの108回目の誕生日（青年の島、2015）



ハバナ日系人連絡会の代表らと（2022）

“

「不安でたまらなかった私に
勇気をくれたのは、やっぱり
日本文化でした」



風呂敷ワークショップ（博物館「アジアの家」、2022）



在キューバ日本国大使館
広報文化班